

国指定史跡 浅間古墳 埋葬施設が存在か

埋蔵文化財ニュース

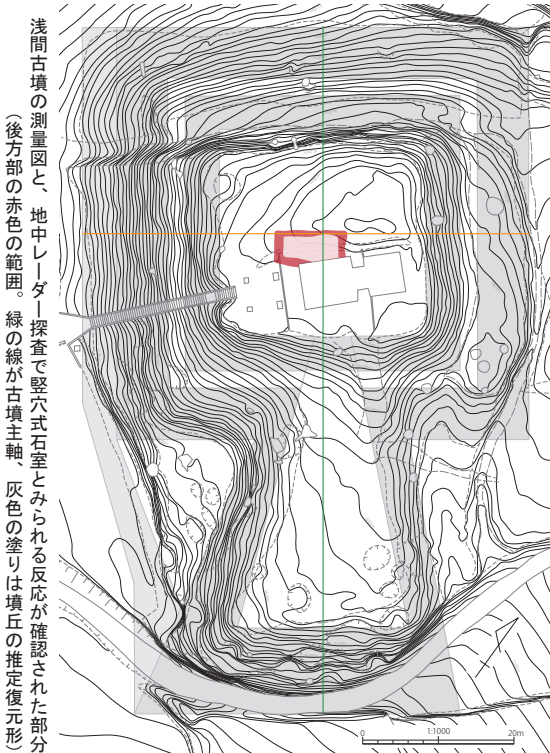
2020年(令和2年)2月吉日
富士市市民部
文化振興課
富士市埋蔵文化財調査室

「竪穴式石室」の可能性 「地中レーダー探査」で非破壊調査

富士市増川に存在する国指定史跡「浅間古墳」で、埋葬施設の有無を確認するための「地中レーダー探査」が行われ、後方に石室が存在する可能性が高いことが判明した。

地中レーダー探査とは、高周波数の電磁波を地中に放射し、その反射波を測定・解析することで、地中の地質状況や空洞、埋設物などの位置や深さを推定する調査である。地上

から非破壊で地中の様子を調べることが可能で、発掘調査が難しい国指定史跡である浅間古墳の内部構造を調べる有効な方法として採用された。調査は令和元年10月上旬～中旬に実施された。古墳の前方部と後方部の平坦な部分に、原則として1.0m間隔で測定機器を走行させ、他と異なる反応を示した部分では0.5m間隔で細かく測定を行った。



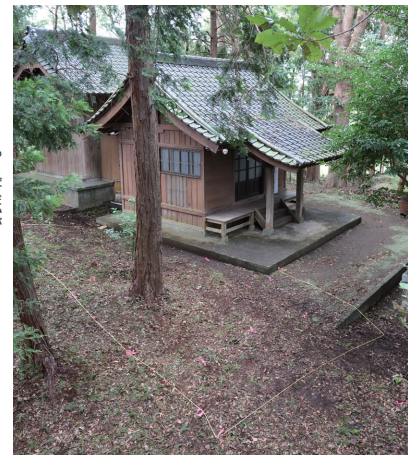
浅間古墳の測量図と、地中レーダー探査で竪穴式石室とみられる反応が確認された部分(後方部の赤色の範囲)。緑の線が古墳主軸。灰色の塗りは墳丘の推定復元形



浅間古墳の位置



測定機器を走行させ地中レーダー探査を行う



埋葬施設の存在が考えられる範囲(黄線の方形部分、奥は浅間神社社殿)

調査の結果、後方に建てられた社殿の西側で地表から2.0～2.5mほどの深さに、強い異常反応を示す長辺約9.5m、短辺約6.8mの範囲と、その内側に異常反応を示さない長辺約7.4m、短辺約2.2mの範囲が確認された。これは「幅1～3m程度の構造物に囲まれた埋設物」を示す反応である。

この地点は一般的に埋葬施設が造られる場所であり、ここに天井石が存在しない竪穴式石室が残存している可能性が高いと考えられる。これまでに浅間古墳での発掘調査は行われておらず埋葬施設については明らかでなかったが、科学的調査により初めてその位置や構造についての知見が得られることとなった。

【浅間古墳】古墳時代前期後半(4世紀中頃)に築造されたとみられる全長約91mの大型の前方後方墳。前方後方墳としては東海地方で最大の古墳であり、沼津市の高尾山古墳、神明塚古墳に続いて築かれた東駿河地域の首長墓である。昭和32年7月に国史跡に指定された。

画期的な調査成果 専門家はこう見る

明治大学文学部史学地理学科
考古学専攻専任准教授
若狭 徹氏

東海地方最大級の前方後方墳である本古墳の埋葬施設の構造が推定できるところになったことは考古学的にきわめて重要である。

埋葬施設が主軸に直交するのは本古墳に先立って築造された沼津市高尾山古墳と同じであり、高尾山古墳から地域首長権の系譜を引いていることが推定される。高尾山古墳は木棺直葬であったが、次代の浅間古墳の段階で竪穴式石室が採用されたとなると、斜面に葺石が採用されていることも含めて、中央政権との関係が深まったことが推定される。

今後は非破壊調査を尽くしたのちに、墳形確認調査などを実施するかどうか、その方法を慎重に検討していく必要がある。

筑波大学人文社会系准教授
滝沢 誠氏

浅間古墳は《珠流河国》の基盤となる政治的領域の形成過程において、きわめて重要な役割を果たしたとみられる有力首長の墳墓と考えられ、静岡県東部地域の古代史を語るうえで欠かさない存在である。

推定された埋葬施設は墳丘の主軸に対して直交する方向に設けられている。古墳時代前期に築かれた東海地方の前方後方墳と共通する特徴をもつことを示しており、浅間古墳の性格を解明するうえで重要な手掛かりとなるものである。

調査結果は、埋葬施設が古墳時代前期に特徴的な長大な竪穴式石室であることをうかがわせるものである。しかし、天井石が存在しないと推定されるなど、他と異なる特徴をもっている可能性がある。竪穴式石室の存在をもって近畿地方(ヤマト王権)との関係のみを強調することはできないかも知れない。さらなる実態解明が期待される。